〔研究ノート〕

『郷土研究』創刊号と高木敏雄

鈴木寛之

The first issue of "KIODO-KENKIU" and Toshio Takaki

Hiroyuki SUZUKI

要旨
Toshio Takaki (1876-1922) is the researcher who established the foundation of mythology of Japan and played a very important role in the history of folklore. Takaki started the monthly magazine "KIODO-KENKIU (Hometown Research)" of the first full-fledged folklore research in cooperation with Kunio Yanagita in Japan, and edited and published the "Collection of Japanese Traditions" which carried out classification of the tradition of Japan systematically for the first time. This paper reconsiders Takaki's positioning in folklore of Japan through the examination of Takaki's texts in the first issue of "KIODO-KENKIU".

キーワード：民俗学、高木敏雄、柳田国男、『郷土研究』、『日本伝説集』

1．問題の所在

高木敏雄（1876－1922）は日本の神話学の基礎を確立した研究者として知られている。高木は明治９年熊本県菊池郡菊池村〔現、菊池市〕に生まれ、東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業後ドイツ語教師として第五高等学校に赴任(1)、のち東京高等師範学校に移り、松山高等学校・大阪外国語学校等を経て、ドイツ留学を控えた大正11年に数えの47才で早世した。明治37年に若くして『比較神話学』を著わし、日本にヨーロッパ神話学の最先端の理論を紹介した彼の先駆的業績は、日本の神話学史上に揺るぎない地位を占めているといえる(2)。

神話学の領域での業績と並んでその一方、高木は日本の民俗学形成史の上でも極めて重要な役割を果たしている。大正２年（1913）３月、柳田国男

(1875－1962) と協力して日本で最初の本格的な民俗研究の月刊雑誌『郷土研究』[3]を創刊した事と、同年8月、日本の伝説を初めて体系的に分類整理した『日本伝説集』を編集・刊行した事がそれである。

大正2年の時点で日本の民俗研究・伝説研究を牽引する主役格の一人[4]であった高木敏雄はしかし、後に『郷土研究』誌の編集方針をめぐって柳田国男と対立、大正3年4月発行の第2巻第2号を最後にわずか1年2ヶ月ほどで編集担当を降りてしまう[5]。日本の伝説研究史上、画期的な著作であった『日本伝説集』も後年には、柳田国男が監修した『日本伝説名彙』(1950年刊) にその地位を取って替わられた感があり[6]、今日、日本の民俗学研究において高木の業績が振り返られる機会は決して多いとは言えない[7]。

本稿では、高木が柳田と組んで『郷土研究』誌を創刊するまでの経緯を追い、また創刊号に高木がいかなる文章を執筆、掲載したのかについて検証することによって、日本の民俗研究史上、高木敏雄が果たした役割について再検討を試みるための一助としたい。

2.『郷土研究』創刊まで

『柳田国男伝　別冊』〔柳田国男研究会編著　1988〕所収の柳田国男の「年譜」には、高木敏雄の名前は5ヶ所に登場する。その記事に柳田国男と南方熊楠 (1867－1941) の往復書簡〔飯倉編1976〕、高木敏雄と南方熊楠の往復書簡〔飯倉編2003〕とを加えて、ここでは明治44年から大正2年に至る、『郷土研究』創刊までの経緯を概観する。

(1) 明治44年 (1911)

『柳田国男伝　別冊』の年譜 (以下「年譜」と略記) には、明治44年 (1911) 11月27日「神道談話会に出席、初めて高木敏雄に会う。」とある。柳田はこの神道談話会での高木の講演内容を筆記し、記録に留めている(「<講演筆記>高木敏雄「古事記について」」〔柳田・千葉・藤井編1987：139－145〕)。後に柳田が「最初高木君と自分とは、本郷から小石川へ走る電車の釣革にぶら下りつつ、この雑誌を出す陰謀を企てた。ちょうど四年前の神道談話会の帰途であった。」〔柳田1990 (1917) ：483〕と回想することになる、二人に

とって運命的ともいえる出会いの日であった。

「東京朝日新聞」が高木敏雄に依頼して「民間伝説及童話」の募集事業が開始されたのは同年12月７日である〔斉藤1994：139〕[8]。翌明治45年の夏までの間に集まった報告を分類編集し、約１年の後に刊行されたのが高木の編著になる『日本伝説集』である。

12月15日付で柳田が南方熊楠に宛てた書簡には「前便[9]　申し上げ候高木君を中心にて『朝日新聞』にて伝説蒐集を始め候につき、双手声援を約し置き候。その中へ先ごろ御手紙にてうけ給わりしものをも転報するつもりに候。御地にても追い追い御仕入れ下されたく候。〔改行〕高木君の話にて、川童と馬の蹄と関係あること（二つ例あり）わかり申し候。」（12月15日付・南方熊楠宛書簡）とある[10]。

南方は高木が着手したという伝説蒐集事業に興味を示し、この手紙への返事に「『朝日新聞』で土伝を集むるとは、『大阪朝日』にや、また『東京朝日』なりや。いずれも小生は見ぬものなり。いずれか出たやつを小生に送られ候わば、時々なにか申し上ぐべく候。」（12月20日付、柳田宛書簡）と記している。

（２）明治45年・大正元年（1912）

柳田が南方に宛てて、新雑誌創刊の計画と、高木敏雄の人となりについて記した文章を引用する。「フォルクロアの学会は今年は打ち立て申すよう、乏しき有力者連を説きおり候。しかし、雑誌の方はまずもって誘導的任務に力を注がねばならぬ故、小生は会報として体面その他の拘束をうけぬよう独立して発刊させたく存じおり候。…〔中略〕…信仰生活以外にも弘く日本田舎の生活状態を研究し、新しき題目を提供する雑誌としては、何か適切なる名称は有之まじくや、御考え下されたく候。〔改行〕高木君は十二、三年来貧乏にもかまわず[11]非常の精力をもって読書せし人にて、学殖すこぶる軽んずべからずと存じ候。少々変人との評あれど、小生はうまく梶をとり、死ぬまでにぜひ大なる研究事業を完成せしめたく熱望致しおり候。」（２月９日付・南方熊楠宛書簡）

これに対する南方の返事は「フォークロール会はなかなか俗人が見ても珍

談ばかりで面白きものとならん。名称は実にむつかしく候。民族学会、伝説学会、里伝学会、いずれも不適当なり。そのうち一考すべく候。」（2月11日付、柳田宛書簡）という内容であり、それに続けて、不十分なものではあるが、と評したうえで、イギリスにおけるfolklore研究の範疇について紹介をしている。

柳田はこれ以降も新雑誌創刊への意気込みを南方宛の書簡に幾度か記している。「高木君の雑誌いよいよ出刊ときまり候わば、小生は巫女に関する研究を逐次に掲げ申すべし。」（6月12日付）、「小生はこのごろ内閣文庫整理を急ぎ非常に多忙、かつ夜分は例の伝説をまとめ候ためにほとんど他事を捨ており候」（6月26日付）、「来年はもし東京におらばフォークロアの雑誌を出し、資料の散佚を防ぎたく存じおり候。金が五、六百円工面できねば取りかかりにくく候。」（12月10日付）、「先ごろより高木君と二人にて売れぬ雑誌を出す計画を立て候も、此方は金がなきために着手し能わず。来年はどうしても実行すべく候につき、その上はそれへどしどし御掲げ下さるべく候。」（12月15日付）などとあり、雑誌創刊へ向けての気分の高揚が感じられる。

（3）大正2年（1913）

柳田の「年譜」には、1月21日「高木敏雄と郷土研究社から出版する雑誌について打ち合わせる。」とある。同日付の柳田の手紙に「初号は高木と二人で書くつもりに候。」（1月21日付・南方熊楠宛書簡）とあり、創刊号は二人だけで執筆する方針を固めたことがわかる。1月29日には「第十四回郷土会。高木敏雄が阿蘇南郷村の話をした。」[12]（「年譜」）。このころ雑誌名が決定し、柳田が「小生の雑誌（『郷土研究』と題す）は、初号のみは編者二人にて全部を作る考え」（2月5日付・南方宛書簡）と記すに至る。

3月14日には「兼任法制局書記官を免ぜられる。高木敏雄と協力して雑誌『郷土研究』を創刊。」（「年譜」）、いよいよ新雑誌が発行されることになる。『郷土研究』第1巻第1号の奥付には「大正二年三月七日印刷」、同「十日発行」とある。「編輯所　東京市小石川区高田老松町十七番地　郷土研究編輯所」「発行所　東京市小石川区竹早町三十七番地　郷土研究社」と記された前者は高木敏雄、後者は岡村千秋の住所である。『柳田国男伝』では山下紘

一郎が「高木が編集校正事務、柳田は資金面を担当することになっていた。この『郷土研究』が中心的に取り上げた問題は、民間信仰、伝説などいわゆる民俗学的な研究であった。」〔山下1988：410〕とまとめている。

以上みてきたように、日本最初の本格的な民俗研究の月刊誌『郷土研究』創刊号は、柳田・高木の出会いからわずか1年3ヶ月ほどで発行されたことになる。次にこの創刊号に二人がどのような内容を盛り込んだのかについてみていきたい。

3.『郷土研究』第1巻第1号

（1）創刊号の内容

先にみたように、柳田の南方宛書簡では、創刊号は二人だけで執筆することがうたわれている。実際、『郷土研究』の創刊号では雑誌のイメージと形式を定着させるため、掲載記事の「大半を柳田と高木が執筆」〔荒井1988：449〕したものとされている。

第1巻第1号の「目次」に掲げられている内容・執筆者名は以下のとおりである。

◎ 郷土研究の本領（高木敏雄）
◎ 巫女考（川村杏樹）
◎ 小篇
　蝦夷の内地に住すること（柳田）／牛の神話伝説補遺（高木）／宅地の経済上の意義（柳田）／三輪式神婚説話に就て（高木）／キナカ（柳田）
◎ 山人外伝資料（久米長目）
◎ 今昔物語の研究（赤峯太郎）
◎ 資料及報告
　猫岳（筑堂生）／釜ヶ淵（泉関次郎）／茶屋の娘（同）／宇土権現（榎田伯人）／神崎森の下（前田林外）／鹿教湯（竹内正吉）／下田富士（東谷春漣）／須川池（竹内正吉）／船木（今橋稔一）／死神送りの風俗（高橋生）／長者原（清水兵三）／岩の掛橋（中西利徳）

◎ 典籍　地方誌未刊種目
◎ 紙上問答　質問六件
◎ 雑報　郷土会第十四回例会記事　／　千曲川のスケッチ
◎ 広告及社告

このうち「紙上問答」の「質問六件」については、本文中では各々の質問者名が記されており、それぞれ柳田国男、郷土会の一会員、川村杳樹、駿州東村、南天木、高木敏雄によるものである。また「雑報」2件はそれぞれ末尾に「柳田報」、「久米報」との記名がある。

また、目次に掲げられてはいないが、創刊号にはこの他に、誌面の空きを埋めるための収載と思われる以下の4件の記事も掲載されている。「関の五本松（出雲俚謡）」、山口笑(ママ)[13]「西行法師の閉口せし山賤の歌」、「子守唄（肥後国菊池郡）」、「地づき唄」（肥後国菊池郡にて採集）[14]。

以上のように、執筆者として高木の名が明記されているものは巻頭の「郷土研究の本領」と小篇「牛の神話伝説補遺」「三輪式神婚説話に就て」、それと紙上問答のうちの「問（六）」の合計4件であり、柳田国男が執筆したものは（川村杳樹（はるき）・久米長目のペンネームを使用したものも含めて数えると）9件ということになる。ここで柳田がペンネームを用いている理由が、創刊号で執筆者が不足するための措置だとするならば、高木敏雄についても、同様の措置をとった可能性は考えられよう。

（2）「赤峯太郎」をめぐって

柳田・高木以外の創刊号への寄稿者についてみていきたい。まず「今昔物語の研究」を著わした赤峯太郎がいる。この冒頭で赤峯は、今昔物語集に記載された説話の内容には「外国伝来の伝説や童話らしく思はれるものが、随分あるやうに思はれる」と記し、その出典研究を志す今回の論考について、「趣味を同じくする者の手に成る、未完成の共同展覧会である、或は乗合船の談話室かも知れぬ。」と表明している。ここで「共同展覧会」とあるのは、直接的には本文中に「西域記」の研究者である堀謙徳からの書簡を引用していることを指すものだろうが、同時に、次号以降の、多くの論者による共同

研究を呼びかけたものと解せられる。実際この言葉のとおり、1巻3号では著者名を「乗合船」とした「今昔物語の研究」が掲載されることになる。

また、創刊号の赤峯太郎「今昔物語の研究」で話題に出ている、僧侶が牛の後を追って穴に入る話の出典をめぐる考察については、この年1月の時点で、南方と高木との間で書簡のやりとりがみられる[15]。創刊号に高木が寄せた「牛の神話伝説補遺」の末尾は、牛に誘われて穴に入った僧の話が今昔物語の天竺の部に出ていると述べた後で、「この話はその性質から云つても、牛の神話伝説の範囲に属すべきものではないし、且つ「今昔物語」の研究上頗る面白い事実を説明するの材料であるか、別に題を改めて、「今昔物語」の研究の場所で、詳細に述べる筈である。」という一文で締め括られており、これは同じ号に掲載した赤峯の論考をさすものと考えられる。創刊号が本当に柳田・高木二人だけの執筆によるものならば、赤峯もいずれかの筆名と考えられる。

この「赤峯太郎」について、先行研究の多くは柳田国男の筆名としている[16]。以下、『郷土研究』への「赤峯太郎」関係と思われる掲載記事一覧を掲げる。

表1　『郷土研究』での「赤峯太郎」関係記事一覧

巻号	執筆者名	表題	記載頁	備考
1巻1号	赤峯太郎	今昔物語の研究	45－51頁	本文中に堀歌穂の書簡を引用。
1巻2号	赤峯太郎	同情悲願の御利益〔小篇〕	92頁	肥後国飽託郡の足手荒神について他
1巻3号	乗合船	今昔物語の研究	166－172頁	本文中に南方熊楠、福原健太郎、原慥郎、赤峯太郎の報告を引用。
1巻3号	赤峯生	神道談話会〔資料及報告〕	184頁	
1巻4号	赤峰	［雑報］（「郷土会例会」他5件）	255頁	「他5件」も赤峰の筆かどうかは不詳
1巻9号	赤峰太郎	板橋三娘子［小篇］	544頁	
1巻9号	赤峰太郎	天然伝説〔資料及報告〕	569－570頁	

創刊号に続いて1巻2号に寄せた「同情悲願の御利益」は、各地の流行神に関する短文の報告である。その後「雑報」などの細かな報告を除けば、「赤峰太郎」が登場するのは1巻9号であるが、これは創刊号に赤峯が載せた文章に対する南方熊楠の批判が届き、その反論というかたちで書かれたも

のである。創刊号「今昔物語の研究」の中で赤峯は「四国辺地を通る僧が馬に成つた話」の「本源が、「幻異志」の板橋三娘子であることは、両者を比較して見ると、少して疑ふの余地がない。」〔50頁〕と指摘したが、のちに南方熊楠は第1巻弟9号「今昔物語の研究」でこれを批判し、「高木君は幻異志の板橋三娘子の譚が此語の本源たる事疑ひ無しと言れた」のだが結論をいえば「単に類話と云べきのみ」だと指摘したのである〔556頁〕。

これと同じ第9号の544頁で、赤峰太郎は先んじて反論を掲載しており、「今昔物語の馬に成つた僧の話は幻異志から出たと自分が云つたのに対して、南方氏は本号の「今昔物語の研究」中に幻異志の話は西洋の話と同じだらうと云はれてゐるけれども、さうでない。」と述べている。このやり取りだけをみれば、「赤峯（赤峰）太郎」は高木敏雄の筆名ととれる(17)。実際、赤峯太郎の用いる「童話」「天然伝説」などの用語は高木敏雄が多用するものであるし、高木が『郷土研究』から離れた後は赤峯名義の記事が掲載されていない点も考え合わせられるが、『郷土研究』の「雑報」欄は、署名の有無に関わらずその扱いは難しく(18)、ここでは高木の筆名である可能性を指摘するに留める。

（3）「資料及報告」欄の著者

『郷土研究』創刊号の「資料及報告」欄には12件の報告が寄せられているが、これらのうち「高橋生」の報告による「死神送りの風俗」（＝静岡県の年中行事に関する報告文）1件だけをのぞき、他11件は後にすべて高木の『日本伝説集』にも収録されている。『郷土研究』の寄稿文と『日本伝説集』の掲載文とを比べてみると、後者ではさまざまに字句の修正が施されているが、その内容に特に目立った違いはない。以下に一例を挙げてみる。

『郷土研究』1巻1号「猫岳」

吾が郷里筑前鞍手郡の田舎にては、人家に飼ふ猫は成長する内に、何処にか姿をかくしてしまう、其の期間は大抵三十日から六七十日、之は皆四五十里もある肥後国の猫岳（根子岳）に行にゆくとのこと、行から帰つて来た猫はすべて身体がやつれて見る影もない有様、その上耳は裂けてゐる、これが

若し一貫目以上の体量にでもならうものなら化けると云つて大変な騒ぎ（筑堂生）

『日本伝説集』民間信仰篇第十九（ホ）根子岳

筑前国鞍手郡の田舎では、飼猫が年を取ると、何時か姿を隠すやうになる。大抵三十日から七十日位で、それが過ぎると帰つて来るのであるが、帰つた当時は、身体が窶れて、見る影も無い。そして耳までも、少し裂けかゝつてゐる。若しこれが一貫目以上の体量にでも成らうものなら、化けると云つて、大変な騒ぎである。三十日から七十日の間も、何処へ往くかと云ふと、すべて肥後国の根子岳へ往くので、何をしに往くかと云へば、行をしに行くのださうな。（筑堂君）

以下、『郷土研究』の１巻１号、１巻２号の「資料及報告」欄に載った記事で、後に高木の『日本伝説集』にも収録されたものを一覧にしてみる。

表２　『郷土研究』寄稿文の『日本伝説集』への再収録（『郷土研究』１巻１・２号分）

※　１巻１号寄稿分		
『郷土研究』での報告者名	『日本伝説集』での報告者名	『日本伝説集 での題名（〔 〕内は『郷土研究』掲載時の題名）
筑堂生	筑堂君	根子岳〔猫岳〕
山形県泉関次郎	富山市泉関次郎君	釜ヶ淵
山形県泉関次郎	富山県富山市泉関次郎君	茶屋娘
大分県南海部八幡榎田伯人	大分県南海部郡八幡村榎田伯人君	宇土槻現
前田林外	前田林外君	神崎森の下
信濃小県城下御所竹内正吉	信州上田在御所竹内正吉君	鹿教湯
伊豆下田東谷春遖	伊豆下田東谷春遖君	下田富士
信濃小県城下御所竹内正吉	信濃国小県郡城下村竹内正吉君	須川池
今橋稔一	東京府西久保今橋杏園君	船木
清水兵三	清水兵三君	長者原
越後柏崎中西利徳	中西利徳君	岩の掛橋

※　1巻2号寄稿分		
愛媛県小松町青年会寄	今井某君	犬神〔犬神に就て〕
帝大図書館ＳＭ生	東京帝大図書館江須笑君	尾田の丸池九十九曲
群馬東風生	群馬東風生君	榛名富士
牛込吉川泰人	吉川泰人君	濁りが淵
京都下鴨村金沢生	京都下鴨金沢君	池中の鞍
静岡県小笠郡横須賀戸塚生	遠州横須賀戸塚某君	大鎚婆サの火
江州膳所中学森田寛	森田寛君	比良の八荒

新雑誌の創刊に当たって高木は、手元にあった『日本伝説集』のための膨大な資料報告の中から、『郷土研究』誌にふさわしい内容のものを選んで掲載したものと思われる。

4．小　括

日本の本格的な民俗研究の開始の場であった『郷土研究』誌において、創刊当初に編集の舵を取ったのは高木敏雄であり、それは『日本伝説集』の編集と並行しての作業であった。学術用語としての「伝説」の誕生・普及過程を追った斎藤純は、日本で「伝説」という言葉が広く普及したのは高木による『日本伝説集』編纂の事業以降とみてよいと指摘している〔斎藤1994：136〕。

高木は『日本伝説集』の序文に「厳正なる意味に於ての民間伝説集と名づくべきものを、未だ一つも持たず、民間伝説の研究に関しても、未だ何等の信頼するに足るべき定説を示されてゐない今の世間に於ては、此小冊子の出現は少くとも一つの大なる事実である。」と記しており、その内容への自信のほどがうかがえる。

『日本伝説集』は郷土研究社から発行されたものではあるが、実質的には高木の自費出版であり、その内情は厳しかった面もある。柳田は大正2年9月5日付内田魯庵宛書簡で次のように述べている。「伝説集は高木君の自力事業にて小生の計画とは無関係に候へ共もし二〇%位の手数料にて御店に御置被下るやうならば三十部でも五十部でも悦びてさし出可申と存候　高木君は貧窮の中より三百円ばかり工面してあの本を出したさうに候　せめて元手

だけでも早く取かへさせ度切望いたしをり候　よろしく御世話ねがひ上候」（『定本柳田國男集』別巻第四、筑摩書房、680－681頁）

『日本伝説集』刊行後まもない大正2年11月12日、高木敏雄は文部省から「神話伝説調査」を嘱託される〔大塚1976〕(19)。このときから半年も経たずに、柳田の「年譜」の大正3年4月の項には「高木敏雄、『郷土研究』の編集から手をひく。」とある。

先述したように、今日、民俗学における高木敏雄の業績について振り返られる機会は多いとはいえない。神話・伝説・童話の研究者として高名であった高木敏雄を『郷土研究』創刊に踏み切らせ、わずか1年2ヶ月で新雑誌の編集を降りさせた要因、また『日本伝説集』の意義、日本の民俗研究史にとっての高木敏雄の位置づけ等について、ひき続き考察を試みたいと考える。

注

（1）『五高人物史』は高木敏雄を以下のように紹介している。「高木敏雄（熊本出身）　明治二十九年一部文。日本神話学の先駆者で東大独文を出て五高教授となつたが栗野事件でやめ、後東京高師の教授をやつた。独逸語の達人。」〔五高人物史刊行会編　1959〕また熊本の民俗研究史上で高木敏雄が果たした役割について、丸山学〔1958：44〕は以下のようにまとめている。「日本民俗学の最初の月刊雑誌というべき『郷土研究』の発刊にあたって柳田氏と協力した高木敏雄が、民俗学の眼を開いたのは彼の五高在職中の肥後の民間説話の採集であった。この傑出した説話学者は、菊池郡菊池村の出身で純粋の肥後人であったが、早世したためにじゅうぶんに日本民俗学の成立に寄与することができなかった。しかし五高での彼の門下生のなかから神話学者の松村武雄氏が出た。」

（2）大林太良は、それまで国学者や神道家たちによって研究されてきた日本神話を、明治32年（1899）以来、ヨーロッパで発達した神話学の立場から本格的に分析を進めることを始めたのが高木であり、同時に東アジア神話学の先駆者でもあったと位置づけている〔大林1973：390〕。

（3）大藤時彦『日本民俗学史話』は『郷土研究』誌について「この雑誌の資料報告欄に会員からの民俗資料報告が掲載されるようになったことは、民俗学史上極めて重要なことであると言わねばならない。ここで初めて、日本の民俗学の資料の集成というものが始まったわけである。」〔大藤1990：19〕と述べている。

（4）このころ柳田国男、南方熊楠らの動きとは別に、明治45年（1912）5月、東京帝国大学山上会議所にて、石橋臥波と永井如雲を幹事として日本民俗学会が設立され、翌大正2年に機関誌『民俗』が創刊されている（大正4年、通巻5号で廃刊）。「当時の大学を中心として文学、歴史、考古、言語などの専門家を網羅」〔大藤1990：108〕した会であり、役員として井上圓了、芳賀矢一、坪井正五郎、富士川游、白鳥庫吉、大槻文彦、加藤玄智、三宅米吉らが名を連ねており、高木も役員の一人であった。

（5）高木が編集から手を引いてしまった理由について、『柳田国男伝』ではその主な原因として三つを挙げている。高木と柳田との性格上の問題、編集方針の違い、そして高木の生活難である。高

木が研究者向けのアカデミックな雑誌を目指したのに対し、柳田は地方の知的青年層や教員などへ向けての啓発の誌面を望んでいた面が強かった〔荒井1988：451〕。

（6）野村純一は、柳田による「『日本伝説名彙』は、終局、高木敏雄の『日本伝説集』に対する積極的な批判であったとも解釈し得る。」と述べている〔野村1978：216〕。

（7）1998年刊行の『柳田國男事典』には「高木敏雄」が立項されている〔岩瀬1998〕が、その参考文献として挙げられている論考が書かれた1970年代半ばは、高木敏雄の没後50年・生誕100年の時期に当たり、『日本伝説集』（1973、宝文館出版）、『人身御供論』（1973、宝文館出版）、『増訂・日本神話伝説の研究』1・2（1973－74、平凡社）、『童話の研究』（1977、太平出版社・講談社）と、高木の著作が次々に復刊された時期である。この時期に書かれた高木の伝記の中では、布村一夫〔1973〕、山下欣一〔1979〕のものが詳しい。その後2003年になって飯倉照平の編集による「南方熊楠・高木敏雄往復書簡」が活字化されており、高木敏雄研究史の上で重要な資料が加えられたことになる。

（8）斎藤純は「この事業は、柳田の限定よりも広い範囲の伝説の概念を、柳田の啓蒙よりもはやく、一般に印象づけたものと考えられ」ると記している〔斎藤1994：145〕。

（9）『往復書簡集』〔飯倉編1976〕には「前便は不明」と注記がある。

（10）この時点での柳田は「伝説の系統及分類」という論考を前年12月の雑誌『太陽』に発表済みであり、『伝説十七種』と題した本を編む計画について、折々手紙の中で触れている。柳田による伝説集は、実際には『山島民譚集』という題名となって、大正3年7月に出版される。

（11）同じ時期に高木敏雄が南方に宛てた手紙には、「小生目下飯を食ふ為に日本童話の古書に現はれたる者を摸び、『読売新聞』紙上に家庭の読物として発表の計画に御座候。柳田氏の如きは生活上の困難と云ふ事を全く不知幸福の人、小生は子供四人有之、財産無一物にて毎日生活の為に働き、其余暇を以てフォルクローアの為に貢献せんとの野心有之、随分骨折れ申候。」（明治45年3月13日付、南方熊楠宛書簡）とある〔飯倉編2003：256〕。

（12）『郷土研究』1巻1号には「二月廿六日柳田報」として「雑報」の項に次のように紹介されている。「郷土会と云ふ小さな会がある。一月二十九日の雨の晩に其第十四回の集会を開いた。二十人の会員が十四人まで来て、其席では高木敏雄君が阿蘇の南郷谷の話をせられた。南郷谷の久木野と云ふ村は高木君の郷土であるが、習俗及天然の条件の共通なる点から観て、此谷全体が輪郭の明瞭な一箇の郷土である」。

（13）この記事は、後に高木敏雄編著『日本伝説集』にも、民間説話篇第二十一「（イ）西行法師と山賤の歌」として掲載される。その際の報告者名は「山中共古君」とあり、「山口笑」は「山中笑（＝共古）」の誤植。

（14）菊池郡の民謡の歌詞2つは無署名記事である。大塚正文はいずれも「高木敏雄採集」としている〔大塚1974〕。

（15）南方熊楠「高木敏雄宛書簡」（大正2年1月24日付）：「御下問の牛を曳ねて穴に入りし話、原文は『西域記』に有之（これあり）候。また、『酉陽雑俎』にも出でおり、いずれも『法苑珠林』の文に大同にて、字が少々違いおれど、実に少々のことに有之候。『宇治拾遺』のは、これより写せしもの、記憶が少々間違いしことと存じ候。」〔南方1972：554〕。

（16）山田野理夫は『郷土研究』創刊号について「柳田（河村杏樹（ママ）、久米長目、赤堀太郎）は筆名を使用し、高木と二人に拠って執筆していることが知られる。」〔山田1973a：288〕と記し、1巻3号「今昔物語の研究」についても「筆者は乗合船とあるが、柳田国男（赤堀太郎）が主として執筆している。」〔山田1973b：252〕としている。飯倉照平も赤堀太郎は「柳田の筆名」としている〔飯倉1994：4〕。

卯野木盈二〔1976〕は以下に示すように、高木敏雄が明治40年代に用いていたペンネームに「赤

峰禿山道士」「禿山人」があることを指摘しているが、それとは別に「赤峯太郎」についてはやはり柳田の筆名としている。卯野木「高木敏雄の業績」の「三」の注15に「高木は、〔引用者注－明治40年に五高の『竜南会雑誌』に発表した〕この「阿房律」を赤峰禿山道士のペンネームでかき明治四三年から明治四四年にかけて、読売新聞に連載した「驢馬の耳」に禿山人のペンネームを用いている。このペンネームの由来を関べると、赤峰とは現在の中華人民共和国の遼寧省（リィアオ・ニン・シオン）の赤峰（チーフォン）のことであり、禿山はこの赤峰にある赤い禿山のことである。この赤い禿山からは砂漠が一望に見渡せ、この赤い禿山が砂漠の灯台がわりとなり、旅人はこの山を目あてに駱駝を急がせたという。明治、大正、昭和初期の日本人にはよく知られていたらしく、高木のペンネームはこれに拠ったものである。尚、高木敏雄の盟友柳田国男が「赤峰太郎」のペンネームを用いていることをつけ加えておく。」とある〔卯野木1976：163〕。

(17)『＜日本文学研究資料叢書＞今昔物語集』の「解説」では「大藤時彦氏の御教示」により、「赤峰太郎」は高木敏雄のペンネームだとしている。〔高橋1970：304〕。

(18) 佐藤健二は１巻４号の「赤峰」について「中山太郎のペンネームの一つか。」〔佐藤1999：670〕としている。また『郷土研究』の編集は「高木だけでなく「赤峰生」「門太」「門太郎作」などの筆名の人々が手伝っていた可能性は高い」〔佐藤1999：664〕とも指摘している。

中山太郎（1876－1947）は自身の履歴について「柳田先生が、故高木敏雄氏と共同で、雑誌「郷土研究」を発行したのは、大正二年三月であつて、当時、大阪の新聞社に居た私は、創刊号を彼地で謄説したものである。…〔中略〕…「郷土研究」に接し、始めて自分の歩むべき道を明確に指示されたことを覚り、私は勇躍して一路この道に精進した。〔改行〕私は間もなく東京に帰り、柳田先生にもお目にかゝり、その門末の一員として今に御教導を仰いで居るのである。」〔中山1941：１－２〕と記しており、時期的には「赤峰」を中山太郎としても矛盾は生じない。

なお「門太郎」が１巻９号に寄せた「〔資料及報告〕頬白の啼声」では文中に「僕の郷里肥後の熊本」とあり、この「門太郎」に関しては高木敏雄の筆名の可能性もある。

(19) 大正２年12月10日発行『郷土研究』１巻10号〔雑報〕「文部省蒐集日本民間童話調査」にこの経緯が次のように記されている。「日露戦争終結後間もなく文部省が全国各府県に依頼して蒐集した童話伝説俚諺俚謡の調査が、折角文芸調査会の一事業として着手されたのに、行政整理の結果文芸調査会も廃止の運命に遇ひ、右の調査も僅かに俚諺の全部と俚謡の一部が結了したのみで、其他の部分は無期限に延期されたやうな姿に成つたのは、心ある者の窃かに嘆息したところであつたが、文部省に於ても種々考慮を費した後、右の調査整理を特に高木敏雄君に嘱托することに成り、すべての材料は先月中旬同君の手許に引取られた。これで愈々此問題も一段落を告げて、貴重な材料も茲にはじめて此方面の専門家の手によつて根本的に調査されることに成つた。分量から云つて最も多いのは俚謡で全体の六七割を占め、次は童話で約二三割を占め、伝説は殆ど全く皆無と云ふべき有様ださうな。」

引用文献　　※　引用文中の旧字体は新字体に改め、振り仮名も一部削除した。

荒井　庸一　1988　「雑誌『郷土研究』」
柳田国男研究会編著『柳田国男伝』　三一書房　445－481、488－493頁
飯倉照平　1994　「南方熊楠にとっての説話研究」
『口承文芸研究』17　日本口承文芸学会　１－10頁
飯倉照平編　1976　『柳田国男　南方熊楠　往復書簡集』　平凡社
飯倉照平編　2003　「南方熊楠・高木敏雄往復書簡」

南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』5　南方熊楠邸保存顕彰会　246－301頁
岩瀬博　1998　「高木敏雄」
野村純一・三浦佑之・宮田登・吉川祐子編『柳田國男事典』　勉誠出版　768－771頁
卯野木盈二　1976　「高木敏雄の業績」
卯野木盈二編『高木敏雄初期論文集　上巻』　非同体社　143－169頁
大塚正文　1974　「高木敏雄の世界　—高木敏雄年譜補遺—」
『日本談義』通巻370号（復刊第283号・6月号）　日本談義社　52－57頁
大藤時彦　1990　『日本民俗学史話』　三一書房
大林太良　1973　「解説」
高木敏雄著・大林太良編『増訂・日本神話伝説の研究』1　平凡社＜東洋文庫＞
378－394頁
五高人物史刊行会編　1959　『五高人物史』　五高人物史刊行会
斎藤　純　1994　「「伝説」という言葉から　—その可能性をめぐって—」
『口承文芸研究』17　日本口承文芸学会　132－153頁
佐藤健二　1999　「解題」『柳田國男全集』24　筑摩書房　659－689頁
高木敏雄　1913　『日本伝説集』　郷土研究社
高橋　貢　1970　「解説」
日本文学研究資料刊行会編「＜日本文学研究資料叢書＞今昔物語集」
有精堂出版　303－308頁
中山太郎　1941　「巻頭小言」『歴史と民俗』　三笠書房　1－6頁
日本放送協会編（柳田国男監修）　1950　『日本伝説名彙』　日本放送出版協会
野村純一　1978　「伝説・世間話・昔話」
上野和男・高桑守史・野村純一・福田アジオ・宮田登編『民俗研究ハンドブック』
吉川弘文館　210－228頁
布村一夫　1973　「高木敏雄のこと」
布村一夫『日本神話学　—神がみの結婚—』　むぎ書房　182－205頁
丸山　学　1958　「熊本県」『日本民俗学大系』11　平凡社　42－47頁
南方熊楠　1972　「高木敏雄宛書簡」『南方熊楠全集』8　平凡社　495－556頁
柳田國男　1964　『定本柳田國男集』別巻第4　筑摩書房
柳田國男　1990（1917）　「『郷土研究』の休刊」
『柳田國男全集』27　筑摩書房＜ちくま文庫＞
柳田国男研究会編著　1988　『柳田国男伝　別冊』　三一書房
柳田為正・千葉徳爾・藤井隆至編　1987　『柳田国男談話稿』　法政大学出版局
山下紘一郎　1988　「郷土会とその人びと」
柳田国男研究会編著（後藤総一郎監修）『柳田国男伝』　三一書房
395－444、481－488頁
山下欣一　1979　「高木敏雄———その研究と方法」
瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス　—日本民俗学の成立と展開—』
ぺりかん社　87－108頁
山田野理夫　1973a　「資料　高木敏雄ほか」
高木敏雄著・山田野理夫編『日本伝説集』　宝文館出版　279—296頁
山田野理夫　1973b　「高木敏雄と人身御供論」
高木敏雄著・山田野理夫編『人身御供論』　宝文館出版　247－267頁